

ヴヴヴヴヴヴ...

「...あっ♡あっ♡はっ♡あっん...っ♡」

「もう一段階強くしますね♡」

「.....ああっ！♡乳首...っ響く♡♡気持ちいいの響いてる...ツツ♡♡」

昼間のリビングのソファの上。

両乳首にローターを貼り付けられ、ぐちょぐちょに濡れたおまんこはナカを指で撫でられている♡

「松山くん...っ♡もう指じゃなくてちんぽ欲しい♡♡乳首ローターでいじられたままちんぽ欲しいツツ♡♡♡」

「ふふ、いいですよ♡夢子さんのぐちょぐちょのおまんこは、僕ので埋めてあげなきゃ♡♡」

指をぬちゅ...♡っと引き抜き、松山は自身のちんぽを

軽くしごいて夢子のおまんこにあてがった♡

ぐちょぐちょのそこをなぞり愛液を塗りつけ、夢子のおまんこを進んでいく♡

しっかり濡れているそこはなんの抵抗もなく、むしろ歓迎しているかのように収縮して松山のちんぽを奥へ奥へと誘った♡

「っはあ…♡♡♡いいっ♡このちんぽいいっ♡好き♡好き♡おまんこいっぱいになる…♡♡」

「夢子さんのおまんこ、僕のを包んできゅんきゅん♡しててかわいい♡」

ぬちゅっ♡♡ぬちゅちゅっ♡

松山がゆっくり奥を突くと、夢子は恍惚とした表情で息を吐く♡♡

(気持ちいい…♡私で興奮してくれたちんぽでおまんこ突かれるのたまらない…！♡♡このちんぽにイカされたい♡♡)

夢子がおねだりするために松山の首に腕を回した、

瞬間。

ガチャ…と、リビングのドアが開いた。

「夢子…？」

夫の貴文(たかふみ)だった。

「た、貴文さん…！？」

「忘れ物を取りに帰ってきたんだが…これは、一体どういう…」

一気に現実に戻された夢子は慌ててローターを止めて松山から離れようとするが、あろうことか松山は夢子の体を抱きしめ更に密着させた。

貴文は呆然としたまま、リビングに入ってくるでもなくその場で固まっている。

「ま、松山くん、待って…」

「待たないですよ、夢子さんがおねだりしたんじゃないですか、僕のちんぽが欲しいって。僕のちんぽ好きなんですよね」

「うあ…っ♡」

ぱんっ♡

ぱんっ♡

ぱんっ♡

松山が抵抗する夢子の腕ごと抱きこんで体をゆすり始めた。

火のついてた夢子の体はこんな異常事態でも反応してしまう。気持ちいいのが欲しくて欲しくてたまらなかったのだから、全力での抵抗など出来なかった。

「…あっ♡あっ♡や、あ…っ♡あ…ッ♡」

「……旦那さんは夢子さんが他の男とセックスすること了承していたんでしょう？」

見せつけるように腰を揺らしながら松山が貴文を見る。

「そう、だが……」

「もしかしてそういう趣味ですか？自分の妻が乳首にローター貼り付けられておまんこに他の男のちんぽ突っ込まれてんのに勃起させちゃって」

（え…？）

夢子は驚いて松山の肩越しに貴文を見る。

貴文のちんぽがオーダーメイドのスーツの股間の布を少しだけ押し上げている。

「旦那さんもこっち来てくださいよ、しばらくセックスしていなかったんでしょう？夢子さんは複数の男にされるの大好きなんですから、一緒に気持ちよくしてあげましょう？」

「なんだって？複数…？」

貴文の足音がして、こちらに近づいてきた。

夢子はナカに松山のちんぽを感じつつも、少しばかりの恐怖心もあった。

いくら他の男とセックスしてもいいと言われていたとはいえそれは風俗の話だったし(松山たちにはそうは言っていないけれど)、実際目の前で他の男を受け入れているのを見るのなんてきっと複雑な心境だろう。

それでも、貴文のちんぽは勃起しているのだが。

「夢子さんは僕と僕の会社の人間としょっちゅうセックスしてるんですよ。今日は僕ひとりですけど。あ、もちろん合意の上ですけど、どっちかと言うと乱交かな？」

「……そうだったのか」

ソファの背の後ろまで歩いてきた貴文は夢子の後ろに立った。

夢子は恐る恐る顔を上げて貴文の顔色を伺う。

見たこともない複雑な表情をしていた。

「夢子、そいつのちんぽ、気持ちいいのか？」

「……っ」

『ちんぽ』なんて下品な言葉を夫が使うのを夢子は初めて聞いた。

性的なことに淡白なはずの夫がそんな言い方をするなんて。

と、同時に、この人にもこんなことを言う一面があるのかと。それに甘えてもいいんじゃないかと思えた。

「き、気持ちいいの…、松山くんのちんぽ、気持ちいい……あッッ♡」

「夢子さん、突いててあげるから♡もう一回それ言って♡旦那さんの目見て言ってあげてください♡」

とちゅっ♡とちゅっ♡

いつもと比べればかなり優しく、松山は夢子のまんこの奥にちんぽを押し付けた。

「あっ♡んうッ♡んっ♡んッ♡♡」

「夢子…」

貴文は自分を見上げている夢子の頬を両手で包み見下ろしている。その顔は苦痛、の表情ではない。

とちゅっ♡とちゅっ♡

とちゅっ♡

「き、気持ち、い…っ♡♡このちんぽ…♡気持ちいいっ♡♡貴文さんが…ずっとしてくれないから…♡私のまんこ松山くんたちにいっぱいしてもらったんだよ♡♡」

「夢子…！」

「旦那さん、このまま夢子さんイかせてあげますからその距離で見ててくださいね、夢子さんのイキ顔♡」

松山はそう言うと夢子の体を抱え直し、奥をえぐるように腰を振り始めた♡

ごりっ♡♡ごりごりごりごりっ♡♡

「うあっ♡♡あっん♡あ、はッ♡♡あっ♡♡あッ♡♡ああっ♡あッ♡♡」

「またローター動かしちゃいましょうね♡乳首とまんこでイきましょう♡」

ヴヴ…と、乳首に貼り付けられていたローターが動き出す♡

先ほどまで与えられていた感触を思い出して、夢子の体に一気に快感が戻ってくる♡

ヴヴヴヴッ♡♡ヴヴヴヴヴヴッ♡♡

ごりごりっ♡♡ごりっ♡♡ごりごりっ♡ごりごりごり
ごり♡♡♡

「…はっ♡あッう…！♡♡きもち、い…ッ♡♡♡」

「夢子、なんて顔してるんだ…」

「だって…っ♡♡気持ちいいの…ッッ♡♡松山くんのち
んぽ♡私の気持ちいところ♡ごりごりしてくれる…ッッ
♡♡イ、く…ッッ♡♡イく♡♡おまんこも乳首も気持ち
いいっ♡♡♡あっ♡あっ♡あっ♡」

「イっていいですよ♡旦那さんにイくところ見てもらいま
しょうね♡♡僕のちんぽでアヘアヘしてる可愛いところ♡
見せつけましょ♡♡ほら♡ほら♡まんこの奥気持ちいい
ですね♡ここ好きですもんねえ♡♡」

ヴヴヴヴヴヴヴッ♡♡♡ヴヴヴヴヴヴヴッ♡
♡♡

ごりごりごりごりごりごりごりごりッ！！♡♡♡

「あ〜〜〜ッッッ♡♡♡いくっ♡いくいくいくっ♡
♡いくぅ…………ッッッ！♡♡♡」

松山のちんぽに奥をえぐられ、ローターの細かく機械

的な振動に乳首を責められ、貴文に見つめられ♡

夢子は絶頂した♡

足がビクビクっと跳ねて、そらした喉から首元が真っ赤になって浅い息を吐く♡

貴文は息を飲んだ。

自分の妻がこんなに乱れているのは初めて見た。

ごちゅんっ♡♡♡

「んや…っ♡♡」

「まだですよ、僕はイってないですからね♡」

松山は今度は先ほどより深く腰を落とし、ソファーから下半身を投げ出している夢子のおまんこを突き上げるように動かし始めた♡♡

絶頂の余韻に浸る暇もない♡夢子は松山がくれる快感に耐えようと貴文の腕を握り締めている♡♡

「夢子、そんなに気持ちいいんだな、松山くんのちんぽが」

「あっ♡あッは♡♡これ、当たる…っ♡♡おまんこの上側の、気持ちいいところ♡♡あんっ♡♡ちんぽ♡こすれ

るっ♡」

「…俺も、夢子を気持ちよくしたい」

「あ……っ！？」

それまで夢子の頬に添えられていた手が夢子の胸元に降りていき、ぎゅっ♡と貼り付けられていたローターごと乳首を指で挟んだ♡♡

ローターが乳首の根元から先まで全部に当たっている♡

ヴヴヴヴヴッ！！♡♡

「きゃあ”っ♡♡あ”ッ♡♡あ…ッ♡あっ♡あっ♡また、乳首…♡気持ちよくなっちゃう♡♡あぁッ♡♡」

ローターの振動は弱いままなのに貴文の指で強く挟まれているせいでそれ以上の快感を与えてくる♡

夢子は頭から足先まで突き抜けるような気持ちよさに悶えるしかなかった♡

乳首がチリチリと揺らされている♡細かい振動で♡♡
「あ～♡夢子さんのまんこ締まる…♡イったばかりなのにもうこんな気持ちよくなっちゃって♡♡」

ごちゅっ♡ごちゅっ♡ごちゅっ♡ごちゅっ♡

ヴヴヴヴヴヴッ！！♡♡

「ううう…ッ♡♡♡乳首っ、す、ごい…ッ♡♡これ♡
やば…っ♡♡♡んあぁっ♡♡あぁ”ッ♡♡ぐりぐりする
のため♡♡だめ…ッ♡♡♡」

「夢子の乳首、こんなに感じるんだな…、ローター貼り
付けられてそれごと握り込まれて、そんなに体ビクビク
させて…」

そのビクビクする体は後ろから乳首をいじる貴文の腕
が肩をきつく押さえ、悶える腰は松山が両手でがっちり
掴んでいる♡

自由の効かない体はされるがままソファに沈んでい
く♡♡

ヴヴヴヴヴヴヴッ♡♡♡ヴヴヴヴヴヴヴッ♡
♡♡

ごちゅっ♡ごちゅっ♡ごちゅっ♡ごちゅっ♡

「うあアっ♡♡♡あぁ”っ♡♡あッ♡あ”あっ♡♡いい
っ♡いいッ♡♡またくるっ♡♡乳首もおまんこも良すぎ
て…♡♡これいい…ッ♡♡あう…ッ♡♡」

「…夢子さんイキそう？♡足すっごい力んでますね♡
♡」

「い、きそう…ッ♡♡このままして…♡♡乳首しておま
んこ突いてて…！♡♡」

「夢子、上を向いて」

背中を丸めて絶頂に向かって力んでいた夢子はその言葉に素直に上を向いた♡

こちらを見下ろす貴文と目があって、唇が近づいて、そのまま夢子の唇を舌でつつく♡

「はっ、あ…♡♡」

松山に揺らされている夢子の唇を開かせるように貴文の舌が夢子の唇をつついている♡

「あ、む…っ♡♡んう♡……んあっ♡アは…♡♡」

喉をそらせて喘ぐ夢子の舌に貴文の舌が絡みついた♡
♡

顔が逆さを向いているせいでまるで吸着するようにぴったり合わさったまま、貴文は夢子の舌を誘い出す♡♡

そして、ふと夢子の首元に吐息がかかった♡

限界まで上を向き剥き出しになっている夢子の首元に今度は松山が顔を埋め、真っ赤に上気しているそこに口付けた♡かと思えば♡

ぢゅううっ♡♡

と吸い付いた♡♡

「うあ…ッ♡♡む”っ♡♡」

舌を突き出し貴文に舌フェラされ、松山に首筋を力い
っぱい吸われている♡♡♡

ヴヴヴヴヴヴヴッ♡♡♡ヴヴヴヴヴヴヴッ♡
♡♡

ごちゅっ♡ごちゅっ♡ごちゅっ♡ごちゅっ♡
ぢゅぽっ♡♡ぢゅぽおっ♡♡ぢゅるるっ♡♡♡ぢゅぽ
っ♡♡♡
ぢゅううっ♡♡ぢゅっぢゅっ♡♡ぢゅううッッ♡♡

「…っ♡♡は、ア…♡♡♡ん…う♡♡♡う”う…ッ♡」

夢子は舌も首筋も乳首もおまんこも、全部が気持ちよ
くてまた全身で力ませ目をきつく閉じた♡♡

(いい…！！♡♡気持ちよすぎる♡♡このままイきたい
♡♡舌吸われて首吸われて♡♡息吸えなくて頭クラクラ
する…っ♡♡二人に支配されてるみたいで興奮する…！
♡♡♡)

「夢子、イって、俺とキスしながらイって」
ぎゅううっ♡♡

■続きは製品版にて♡